

(財) ひょうご震災記念 21 世紀研究機構
共生社会づくり政策研究群

被災地における老人クラブの復興経験と現状に関するアンケートの結果について (中間発表)

震災 15 年を機に、これまでの復興経験を検証するために、被災市区（神戸市、尼崎市、西宮市、芦屋市、伊丹市、宝塚市、川西市、明石市、三木市、洲本市、南あわじ市、淡路市）の全単位老人クラブ（2430）を対象にアンケート調査を実施した（2009 年 10 月～11 月、回収数 1400、回収率 57.6%）。震災の日を機に、成果の中間発表として、15 年の復興過程における老人クラブの経験について一部結果をとりまとめた。今後さらに分析と調査を進め、2010 年 3 月に最終報告書をまとめる。

- ・ 震災から 15 年という時間は長い。当時 65 歳で新入会員だった会員も 80 歳になる。
- ・ 震災当時、被災地のクラブはリーダーや会員の被災や離散から解散の危機に直面したクラブも少なくなかったが、「老人クラブの灯を消すな」を合言葉に、全国からの救援金や「友愛の手紙」など、さまざまな支援が届けられた。全国の老人クラブが拠出した救援金は総額 19 億 6000 万円余にもなった。その一部は単位老人クラブにも配分され、クラブの復興や支援活動に利用された。「当時の救援金が 15 年たった現在も役立っている」
- ・ そうしたさまざまな支援と会員の復興活動の尽力もあって、当時の記録によれば、1 年以内に解散した老人クラブは県老連では皆無だった。神戸市老連では解散クラブもあったが、仮設住宅での新設クラブもあり、震災の前後でのクラブ数は 2 減にとどまった。
- ・ 震災から 15 年たった現在、回答のあった被災地の老人クラブのうち、18.3%は震災後に設立されたものである。
- ・ 被災当時にまだ高齢者ではなかった住民が、復興活動での経験をもとに高齢者になって設立したり、復興活動や防災活動に取り組むなかで地域の受け皿として設立にいたったケースなども見られる。「新興地域で震災以前は地域の交流がほとんどなかったが、震災によって地域連携の重要性が認識され、クラブの立ち上げ機運が高まった。設立後はまちの雰囲気が友好的に変身してきている」
- ・ 回答のあった被災当時から存在するクラブのうち、54.0%は当時被災したにもかかわらず活発な活動を展開していたが、46.0%は被災により活動が活発に展開できなかつたり、活動休止状態や存続の危機に陥った。
- ・ 被災直後に活発だったクラブのうち、80.8%は、震災から 1 年～5 年の時期にも活発な状態を維持していた。19.2%は、被災直後には活発だったが、その活発さを維持することが困難になった。
- ・ 同様に各期別の活動状況についてのデータから期間の推移を推計した結果をみると、震災後 5 年～10 年の時期に活発なクラブと活発でなくなるクラブとの分かれ目があることがわかる。震災後 1 年から 5 年ごろまでに活発だったクラブのうち、次の 5～10 年ごろまで引き続き活発だったクラブは63.7%であり、したがって 4 割近くは活動が活発でなくなるか、存続の危機に陥っている。だが、5～10 年の時期に活発だった場合は、92.5%がその後 10～15 年の時期にも活発さを維持できている。逆に、活動が低調・存続の危機にあった場合にも、81.7%がその後も活発になっていない。（図 1 を参照）
- ・ そこで「5 年～10 年」期に活発であったクラブ（被災時の状況がはっきりしているクラブのみ）に焦点をあて、低調・存続危機にあったクラブと比較すると、次のような特徴があった。

活発であったクラブは、

- ① 地域の被災状況がより深刻であった（図 2）
- ② 現在の会長で、女性の割合がより高い（図 3）
- ③ 現在の活動実施率では、「安全管理」（防災活動など）「学習・教養」「伝承・世代間交流」がより高い（図 4）
- ④ 高齢者見まもり活動の活動率が高い（図 5）
- ⑤ 見まもり活動で、他の地域組織や民生委員等と連携している割合が高い（図 6）
- ⑥ 震災を契機に「会員や住民の意識が高まった」が倍以上高い（図 7）
- ⑦ 復興過程で活発になった活動では、特に「地域行事」「安否確認」「地域福祉活動」「防災活動」がより高い（図 8）

- ・ 以上の結果は、震災での被災経験と復興活動がその後のクラブ活性化に役立っているということを示しているのではないか。
- ・ 震災の被害が深刻であったが、他方でそれは地域住民やクラブの会員の意識が高まりや地域のつながりを構築することにつながり、それらが復興過程でのクラブ活動活性化の重要な基礎になった。
- ・ 活発なクラブは、防災活動や見守り活動など、震災の教訓により直接結びついた活動に積極的に取り組むとともに、地域行事や世代間交流など、高齢者だけではない他の世代を含んだ広い意味での地域との交流活動をより積極的に展開している。
- ・ 地域の他の組織等と連携するなど、クラブ内で閉じた活動だけでなく、広く地域に開かれた組織運営がはかれることで、クラブの存在と意義を地域に認知させることが可能となり、他方また、地域と有機的に結びついたクラブの展開が、クラブのみならず地域の活性化にもつながることになる。
- ・ こうした活動展開や組織の変革に震災の復興経験を活かすことができたクラブが、活発な活動を維持し、ひいては地域の復興にも貢献してきたのではないか。

引き続き調査研究と分析を進め、2010年3月に最終報告書をまとめる。

図1 クラブの活動状況の推移

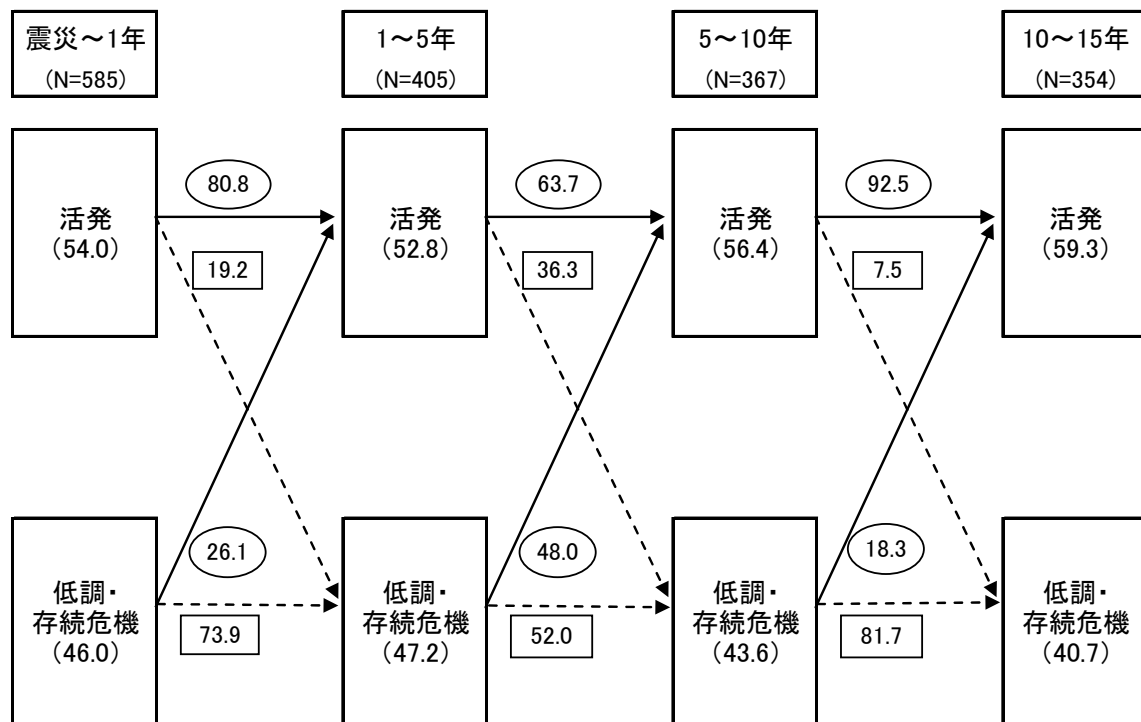
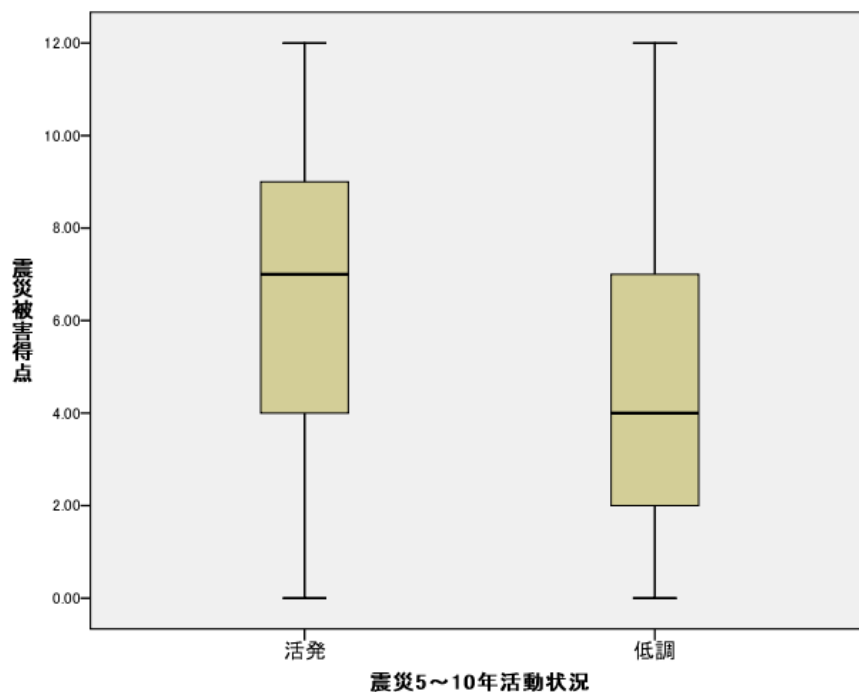


図2 地域の被災状況評価の平均値



	N	平均値	標準偏差
活発	199	6.899	3.357
低調	153	5.150	3.490

図3 現在の会長の性別

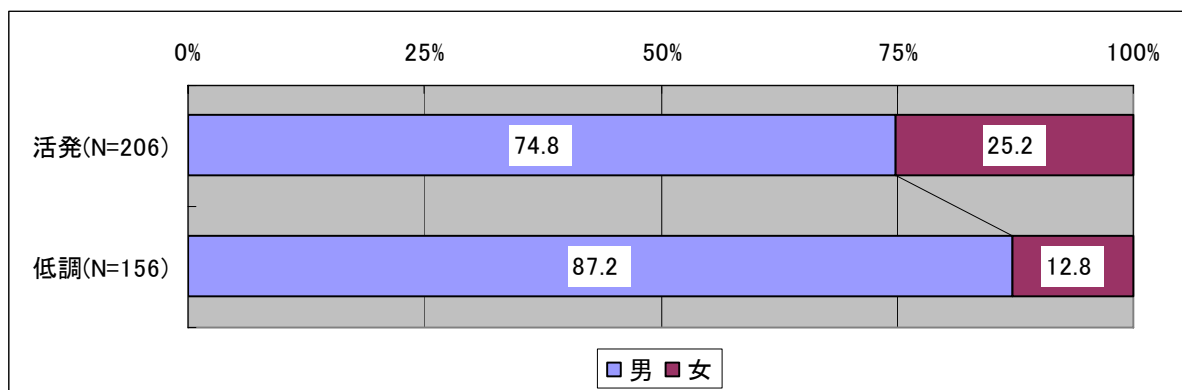


図4 現在行なっている活動内容

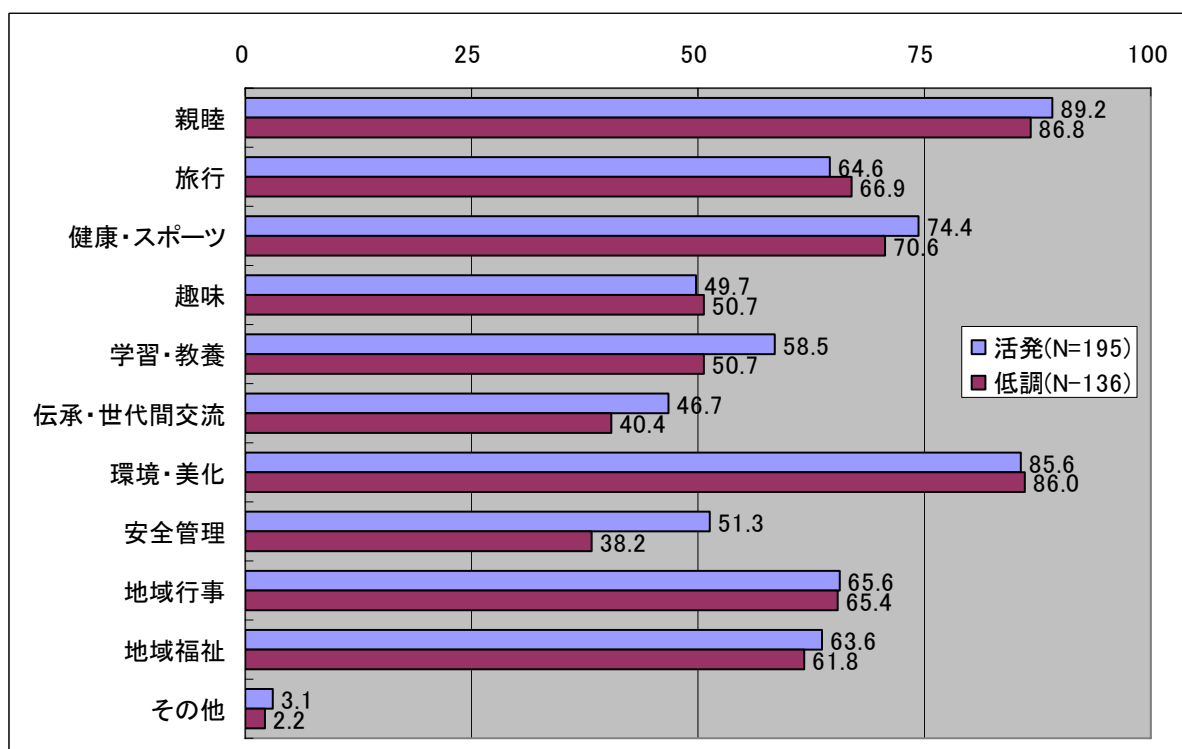


図5 見守り活動実施状況

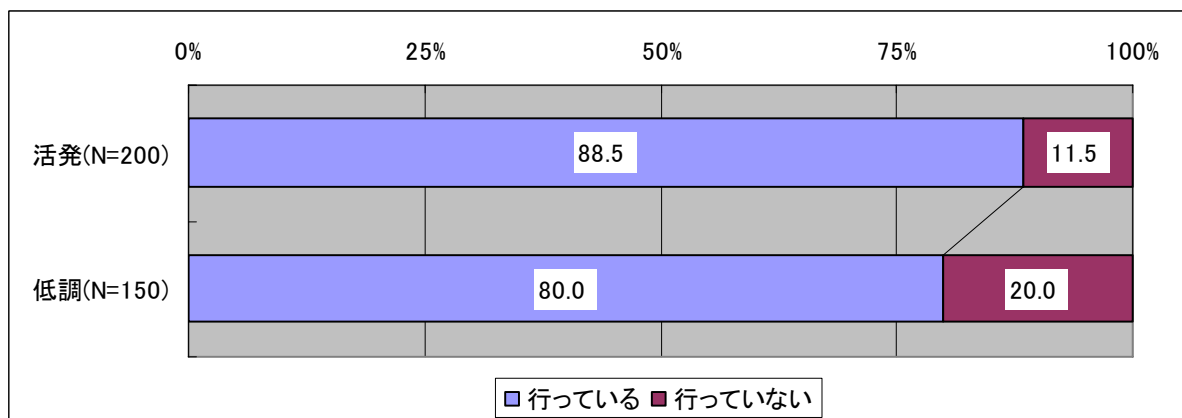


図6 見守り活動で連携している組織

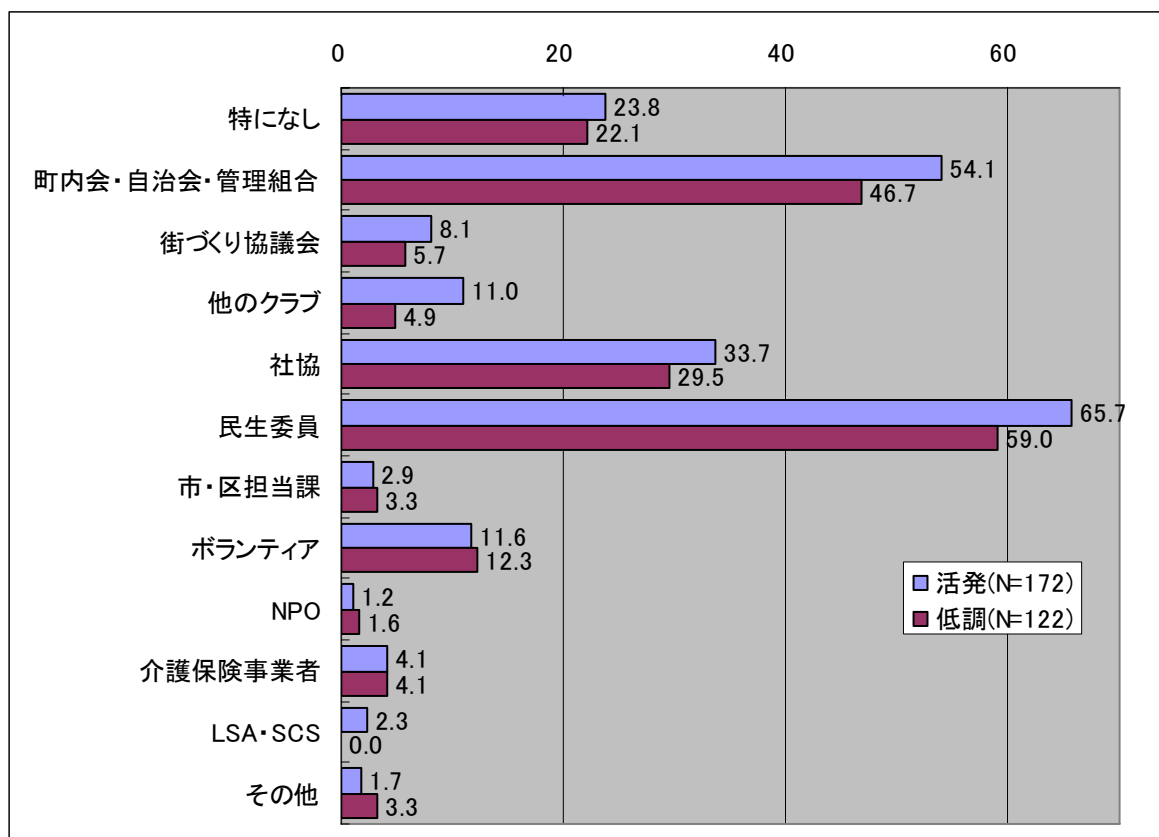


図7 震災による影響の理由

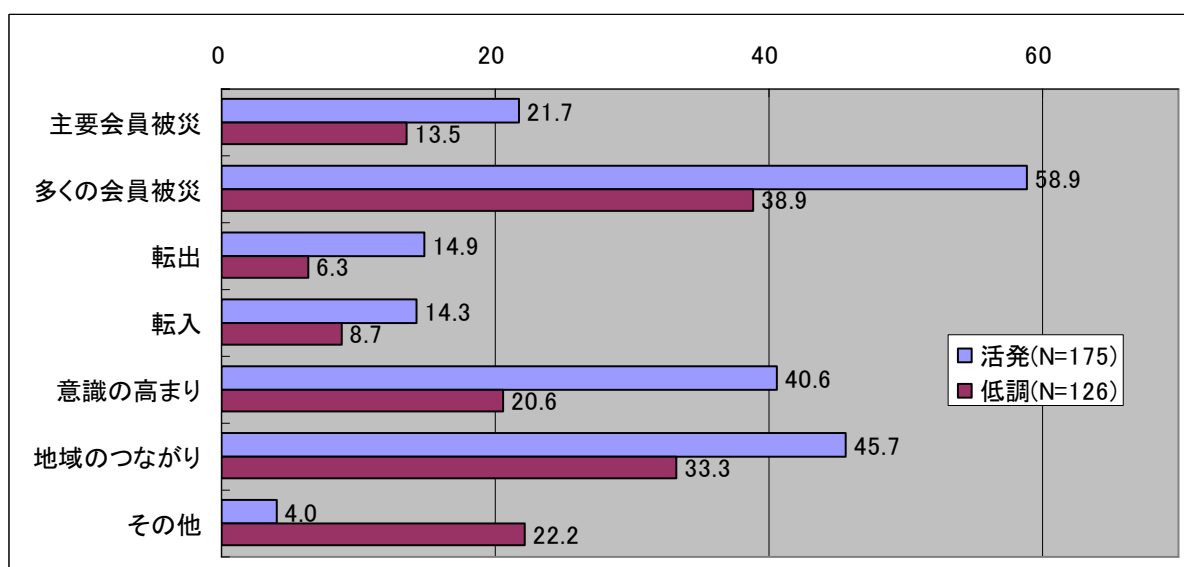


図8 復興過程で活発になった活動内容

